

## 論文の和文要旨

論文題目 イラン立憲革命期における詩的言語の研究

氏名 中村 菜穂

はじめに論文の目的と主旨を説明した後、構成および各章の内容について述べる。

19世紀後半から20世紀最初の四半世紀にかけて、イランでは未曾有の政治・社会変動が起こっていた。宗教層、知識人、大衆を巻き込んだ「法による政府」を求める動きは、1905年末から1911年にかけての立憲革命に結実した。「立憲革命詩」は、この時代に生を受け、立憲革命を支持した詩人たちによって詠われた政治・社会批判の詩である。

本論では、イラン立憲革命期の5人の詩人を取り上げ、それぞれの生涯と作品の特徴の分析を行い、この時代における詩人たちの問題意識を探るとともに、詩の変化要因となった政治、社会の動向とともに、ペルシア語の詩の歴史におけるこの時代の詩の特徴について考察を行った。

一般に、政治史研究においては1911年の第二次立憲制崩壊後から1921年のズィヤーオッディーンとレザー・ハーンによるクーデタ、また1925年のパフラヴィー朝樹立までの時期を過渡期として扱っているが、立憲革命詩が書かれるのは立憲革命からこの時代までである。したがって文学史の記述においては1921年もしくは1925年までを立憲革命期に含めている。

文学史的観点からは、立憲革命期はペルシア詩の歴史における重要な転換期に位置づけられる。西暦9世紀に始まるペルシア語（近世ペルシア語）の詩は、初期の写実的な自然描写がみられた時代から、徐々に比喩や誇張が増してゆき、16世紀以降インド・スタイルと呼ばれる難解さを極めた詩の傾向を生んだ。それに対して、18世紀後半からイランでは文学の古典回帰の動きが起こり、後に「復古運動（nehzat-e bāzgasht）」と呼ばれることになる。19世紀、ガージャール朝下ではこうした思潮を背景に宮廷詩が復活し、詩人たちは古典作品の模倣に励んだ。本論の論点の一つは、復古運動が詩に果たした意義を再考することにある。

立憲革命の時代には、詩人たちは宮廷の狭いサークルに留まることなく、民衆のために、人びとに理解しやすい平易な語彙や日常語を用いて詩を詠んだ。その媒体となったのは新聞である。19世紀後半から、ペルシア語の新聞は国外の諸都市で発行されたが、立憲革命とともに国内でも数多く発行されるようになる。立憲革命詩の担い手となった人びとは、民衆の啓蒙や政治・社会的主題において詩作し、新聞を主な媒体として発表した。

こうした政治的な詩の一時代は、後に、1930年代以降徐々に試みられ、20世紀後半に

隆盛をみるペルシア語の自由韻律詩にとって、詩の変化に重要な影響を及ぼしたと考えられてきた。しかしながら、後の詩人や批評家たちは、立憲革命詩を部分的に評価したものの、芸術としての革新性においてはまだ不十分であったとみなしてきた。本研究が着目するのは、まさにこのような思考の枠組みそれ自体である。ある一時代の文学が、後の時代には十分に理解し得ないものとなった背景には、文学をめぐるパラダイムの転換が起こっていたと考えられる。本論は、立憲革命という文学的パラダイムの終焉について考察を加えつつ、ある時代と文学の変容を、その始まりから終わりへ向かって、政治・社会状況の変化と詩人たちの個々の経験および文学をめぐる議論から、なるべく具体的に解き明かすことを目指した。

論文の構成は以下のとおりである。序章において歴史的背景と先行研究、問題設定について上記の内容を述べた後、第1章から第5章まで、5人の詩人を生年順に取り上げ、生涯、詩的特徴、詩の分析の順に記述した。第6章では、この時代の詩の革新をめぐる文学論争を取り上げた。第7章では、立憲革命詩の詩的言語の特徴について、復古運動との関わり、ヨーロッパ文学の受容、同時代における模倣という3つの段階において考察した。終章はそれらの議論の総括とした。

第1章は、立憲革命詩の中心人物の一人、セイエド・アシュラフディーン・ギーラーニー (Seyyed Ashraf al-Dīn Gīlānī, 1870-1934、以下アシュラフと略す) を扱う。イラン北西部の小都市ガズヴィーンに生まれ、幼くして父を失った。イラクのシーア派聖地ではばらく過ごした後イランへ戻り、北部ギーラーン州の町ラシュトを拠点に新聞『北のそよ風 (*Nasīm-e Shemāl*)』を発行した。立憲制を擁護し、教育の必要性を訴えたアシュラフの韻文による創作は、平易な日常語を用い、庶民の幅広い人気を得た。彼の詩に現れた民衆の口承文化の要素や庶民の生活への視点は、同時代の詩人たちに大きな影響を与えたと考えられる。

第2章は、立憲革命期の詩人でありシンガー・ソングライターとして知られるアーレフ・ガズヴィーニー (Mīrzā Abū al-Qāsem 'Āref Qazvīnī, 1879頃-1934) を扱う。ガズヴィーンの礼拝の導師の息子として生まれた彼は、生来美声の持ち主で、若い頃に音楽と書道を学んだ。アーレフは、立憲革命に関わる主題を、抒情詩 (ガザル) やタスニーフと呼ばれる歌謡において作詩し、自ら作曲、演奏して歌った。タスニーフのジャンルは彼によって文学的価値を認められるようになり、また彼自身、自らの歌によって「祖国愛」を人びとに知らしめたことを誇りとした。詩的言語の点では、歌謡の分野はそれほど厳格な言葉遣いが求められないため、アーレフの表現はより柔軟であった。また一方で、感情そのものを詠う「心の人」という彼の人物像は、伝統的な抒情詩の言語から少なからず影響を受けたものと考えられる。

第3章は、立憲革命期からパフラヴィー朝期にかけて活躍した詩人、政治家のモハンマド・タギー・バハール (Mohammad Taqī Bahār, “Malek al-Sho‘arā”, 1886-1951) を扱う。イラン北東部マシュハドのイマーム・レザー廟の桂冠詩人を父親に持ち、彼自身も若くして桂冠詩人となったが、立憲革命に際して政治活動に加わり、デモクラート党機関紙『ノウバハール (Nowbahār)』を発行し、立憲制を擁護する詩を詠んだ。親族や地元の学者たちのもとで学んだ彼は、古典定型詩に優れ、ペルシア語の定型詩における最後の古典詩人とみなされている。彼は古典詩に依拠しつつ、近代的な価値観を持つ詩人であった。文芸雑誌『知の館 (Dāneshkade)』では、ヨーロッパ文学の紹介に力を注ぐと同時に自らの詩論を展開した。

第4章は、イランで共産主義詩人として知られるアボルガーセム・ラーフーティー (Abū al-Qāsem Lāhūtī, 1887-1957) を扱う。イラン西部ケルマーンシャーで神秘主義詩人の父のもとに生まれ、若い頃は彼も神秘主義詩を作ったが、当時の様々な思想傾向のなかでフリーメーソンに参加、その後共産主義へと変遷を遂げた。立憲革命に際して彼の詠った詩は目新しく、写実的な描写を行っていた点で注目される。地方警備隊に所属し、軍人でもあった彼は、1922年にレザー・ハーンの軍事改革に反対して蜂起を行うが失敗し、ロシアに逃亡、さらにその後、タジキスタンで文学者として活躍することになる。本稿では主に1922年以前の詩に注目し、ラーフーティーにおける詩的表現の意識的な使い分けについて考察した。

第5章は、立憲革命期最後の詩人というべきミールザーデ・エシュギー (Mohammad Rezā Mīrzāde Eshqī, 1894-1924) を扱う。イラン西部ハマダーン出身で、地元のアリアンス学校と私設学校に通った彼は、ヨーロッパ文学からも影響を受けていたと考えられる。第一次世界大戦期にアーレフやラーフーティーと知り合い、1919年のイラン・イギリス協定後、容赦のない風刺詩人として知られた。1921年クーデタ後、風刺雑誌『20世紀』を創刊、オペラの形式に関心をもち『イラン諸王の復活』などの韻文劇を創作、自ら演じもした。イランの後の詩で顕著になるロマン主義的傾向を示した詩人であるが、政治活動においては過激な論考や詩を書き、1924年の反共和制運動に際して、体制批判がもととなって暗殺された。彼はまた、新しい詩の端緒を開いた詩人ニーマー・ユーシージの詩「アフサーネ」に最初に注目した人物の一人でもあった。

第6章は、「詩の革新をめぐる議論」と題し、イランの文学史上に知られる詩の論争を取り上げる。北西部の都市タブリーズはとりわけ政治運動の盛んな地域であった。論争は、第一次世界大戦末期に同地で発行されたアゼルバイジャン・デモクラート党の機関紙『革新 (Tajaddod)』と、首都テヘランの文学結社「知の館 (Dāneshkade)」に集った人

びとの間に起こった。『革新』の執筆者である詩人タギー・ラファト (Taqī Raf'at, 1889-1920) は、「文学の革命」を掲げ、古典文学からの断固たる決別を訴えるとともに、古典詩の模倣に終始している首都の文学者たちを批判した。「知の館」の中心人物であり、同名の文学雑誌を主宰したバハールは、ラファトに応答し、文学の革新に同意しつつも古典文学に依拠することを訴える。両者の主張は折り合わず、平行線をたどるが、ここで提起された問題は後の詩の革新にとって重要な契機となった。

第7章は、「模倣と再創造」と題し、立憲革命期の詩人たちに共有される詩的言語の特徴について、古典詩の模倣、ヨーロッパ文学の受容、同時代における模倣の3つの側面から論じる。作品の独創性を重視する近代的な文学観は、この時代にヨーロッパから導入されたが、既存の詩を模倣することは広く行われており、それ自身の重要性を認めることができる。第一に、1世紀以上にわたって続いた復古運動の影響は立憲革命期にも見られ、詩的言語の簡素化をもたらしたほか、古典詩を引用することには人びとの共通の知識に訴える点でも利点があった。第二に、ヨーロッパ文学からは詩や散文の影響が見られるが、その取り入れ方には翻案や模倣などいくつかの段階があった。ラ・フォンテーヌの韻文訳のように、教育的視点が重視されたのも特徴の一つである。第三に、詩人たちの間でも形式の借用や共通する語句がしばしば用いられた。このことは「立憲革命」にかかわる主題の個々人における展開としてみることができる。

終章では、以上の内容を総括し、「立憲革命」を中心的な主題とする詩の一時代が終焉していった過程を、詩人たちの生きた時代の政治・社会状況と、文学の革新に関する議論の変遷の両面から整理した。最終的に、立憲革命という文学的パラダイムは、その両面において継続が不可能となったものの、この時代に試みられた文学の可能性の豊かさは、今日、再評価に値するものであると結論づけた。